

グローバル世界をつなぐ長崎・中国

—記憶の共同体を目指して—

「グローバルヒストリーのなかの長崎」

ハーバード大学名誉教授
アメリカ歴史学会元会長 入江 昭

1. 「記憶の共同体」

今日のトピックの「グローバルヒストリーのなかの長崎」です。全体のタイトルに入っている「記憶の共同体を目指して」から始めたいと思います。

「記憶の共同体」とは何かということ、結局、誰であろうと、どの国の人であろうと、記憶するものを共同に持っていること。それを目指さなければいけない。例えば、日本と韓国あるいは日本と中国との間で、過去に対する認識が異なる歴史問題が、韓国でも中国でも問題にされている。そのことは誤りであって、「共」というのは共同体であるべきだというのが私の考えです。歴史は一つしかない。日本で起ころうと、中国で起ころうと、アメリカで起ころうと、トルコで起ころうと、歴史は一つしかない。記憶が人によって違いがあるとか、国によって違いがあることはあり得ないわけです。

ある特定の何かが起こった。例えば1931年に日本が満州を侵略する。その事実の一つしかない。日本人であれ、中国人であれ、同じように記憶されるものだと思います。実際はそうではなくて、日本人は日本の記憶の仕方、中国には中国の記憶の仕方があるけれど、それは歴史ではない。それは政治です。政治が勝手に歴史の解釈をしている。だから、国家が押し付ける歴史観には、非常に懐疑的で批判的です。国家が「これが歴史観だ」と言って、その国の人たちに押し付けると、それぞれの国家の思惑がありますから、国ごとに別個の歴史が生まれてきてしまう。

ひどい目に遭ったのが僕の世代の日本人です。私は1934年（昭和9年）に、日本に生まれて育ったのでよく分かる。当時の学校で教えられた歴史は、まさに国家が押し付けた歴史であって、「日本は世界一優秀な国だ。日本は今まで戦争で、ほかの国に負けたことがない。日本は何をやっても成功しているのだ」という軍

国主義、国家中心的な歴史観を教え込まれて、戦争中に育ちました。

戦争が終わった年、国民学校（現在の小学校）の5年生だった。戦争が終わると、教育の中身は変わってしまった。「今までの戦争は間違っていた」、「日本は民主主義的な国にならなくてはいけない」、あるいは「平和な国にならなくてはいけない」と。そのような新しい歴史観を、当時はアメリカに占領されていたから、アメリカに押し付けられたと言えるかもしれないが、日本の政府も学校に押し付けた。昨日まで「日本は神国であって、負けたことがない」と言っていた学校の先生が、8月15日になって変わってしまって、「日本は8月に負けたのだ。日本は世界の中の一つ」というようなことを言い出したわけです。

1945年、僕は10歳から11歳でしたけれども、歴史の先生あるいは社会科、数学の先生が急に変わってしまった。政治が変わったからといって、あるいは国家が変わったからといって、政府の言うなりに、歴史観を変えてしまうのはひどいことだと思います。それ以来、どうしても、歴史にしても、何にしても、学問は国家から独立したものでなければならないと信じるようになりました。その信念は現在まで続いています。何を学ぶにしても、個人の認識と努力によって学ぶのであって、決して先生の言うことを鵜呑みにしてはならない。まして、国家の言うことを鵜呑みにしてはならない。

だから、皆さんが歴史を勉強されているか、文学を勉強されているか、いろいろあるでしょうけれども、自分の見方で考えて、自分のものにしていただきたいと思います。私自身、そのようなことを世界各地で申し上げています。もちろん日本の学生さんたちにだけではない。中国に行っても同じことを言うし、アメリカでも、ヨーロッパでも同じ。世界中どこであれ、まず自分たちで考えてほしい。自分たちで本を読んだり、資料に当たったりしながら物を考える。自分なりの一つの歴史観をつくってほしい。そういうことです。確固とした歴史観があれば、世界がどう変わろうと、国家がどう変わろうと、くじけないでしょう。一つの自分なりのものを持っている。それが非常に大事ではないかと思います。

とくに中国と日本の関係になると、「中国人と日本人の間に歴史の共同体があり得るのかどうか」と言われるかもしれないが、もちろん、あります。ないわけがない。実際は努力しないから、ないのであって、中国の人も、日本の人も、同じように過去を見て、同じような記憶をつくっていく。それはすべての人について言えることです。記憶は一つしかない、歴史は一つしかない状況があるべきであって、そうでないのは、政治とか、国家が介入しているからだだと思います。やはり、学問の自由、言論の自由が非常に大事になるわけです。結局、我々歴史を勉強する者にしても、やはり言論の自由を尊重し、自由に研究し、自由に発言す

る。先生の言うことを全部信じない、あるいは国家から言われていることを信じない。それぞれの人の考えで、自分なりに歴史を認識していただきたい。そういうことです。

2. グローバル世界をつなぐ

「グローバルな世界をつなぐ」。この会議のテーマの中にある「つなぐ」という言葉。これは、非常に大事な言葉であると思います。

「つなぐ」とは何か、「つながり」ですね。今日のセッションのキーワードであると思います。極端に言えば、現在の世界のキーワードです。つまり、今の世界が何か、現在の世界をどう理解するか。それは、「つながり」の世界、「世界はつながっている」のだ。今の世界は、かつてないほどの「つながり」がある。ところが、それに反抗する勢力もある。

今のアメリカを見ても分かるし、日本を見ても、他の国を見てもいいのだけれど、世界がこれだけつながっている時に、その「つながり」の中で、自分たちの人生の意義や考え方を創っていかうとする人と、その「つながり」に反対にして抵抗する勢力も各国にある。アメリカでも、日本でも、そうかもしれない。「つながり」は自分たちが他者を受け入れることです。他の国から来た人、あるいは他の国の学生にしても、実業家でもいいのだけれども、つながり合いながら、何かを創っていくことだと思うのです。

いま、アメリカで問題になっているのは移民問題です。「つながり」ということは、世界中の人とつながり合っていこうと。イギリスも、アメリカも、日本もそうでしょうけれども、他の国の人との「つながり」をどうやって創っていくのか。外国から入ってくる人たちとつながり合うことも一つです。それは確かです。だから、外国から入ってくる人を拒絶したり、入れなかったり、することは、「つながり」そのものを認めないことに等しいでしょう。アメリカで現在、「メキシコ人がどんどん入ってくるのはお断りだ」とトランプ（講演時は大統領候補）が言っていることは、世界の流れに逆行する。「つながり」を否定するような人がアメリカの指導者になってしまう。彼がいくら「つながりが嫌だ」と言っても、周りはそうさせないでしょう。つまり、それだけ世界的な現象になっている。

では、なぜ世界的な現象になっているか。一つには経済のグローバル化です。国境を越えた経済のつながりは、ご承知のように随分、昔からあったし、とくに産業革命以降、18世紀以降に、グローバルな「つながり」があった。グローバル化に対して抵抗もあったけれども、根本的には、世界の国境を越えた経済的な「つ

ながり」は、増え続けていくでしょう。それだけではない。人の流れもある。つまり、モノやカネだけの「つながり」では危うい。モノとかカネの「つながり」ができる以上、その支えとなる人と人との「つながり」がなければならないと思います。

必然的にイギリスとかアメリカへ、どんどん外国から移民が入っていかうとする。それを人為的にストップしようとする、あるいは制限するのは、現在の「つながり」ができつつある世界に逆行するものであると思うのです。いくらトランプ氏が唱えても、それはストップするわけがない。

「つながり」は、移民だけで出来てきたわけではない。いろんな形で他の国の人たちと「つながり」を創っていくことは可能です。皆さんの中には外国旅行された方もいると思います。あるいは、外国から来ている留学生の人たちとつながり合うこともあるでしょう。自分たちのところにやって来た外国人とか、あるいは自分から外に出掛けて行って、いろんな「つながり」を創っていく。非常に大事なことだと思います。

3. 〈common humanity〉 一人間は共通

ある意味では、現在の世界は「つながりの世界」です。オバマ大統領が（2016年）5月に広島を訪問したとき、長崎には来られなかった。長崎に来られても同じことをおっしゃったと思う。結局、オバマ大統領が言ったことも、「今、世界は一つになっている、つながり合った世界になっている」ということ。彼が言っている〈connection〉とは「つながり」ということです。

スピーチを読み直すと、幾つかのキーワードがあると思う。一つは、〈interdependence〉相互依存です。それから〈common humanity〉共通の人類、つまり普遍的な人間あるいは人間性。それから、〈connection〉という言葉は彼は使っています。スピーチの最後に出てくるのは、〈interdependence〉、〈connection〉と〈common humanity〉。つまり、共通の人類、相互依存的なもの「つながり」を、「現在の世界だ」とおっしゃった。そのとおりだと思います。少なくともそのような新しい方向に向かっています。それでは、「つながり」とは何か。「つながり」とは、根本的には人と人との「つながり」でしょう。国境を越えた「つながり」ができてくることは、国境において隔てるべきではなくて、人と人との関係が出来上がってくる。人間として、オバマの言葉でいうと、「普遍的な人間」(common humanities)としてつながり合っていく。これが現在の世界の大きな特徴だと思います。

人間としての「つながり」を妨げるものがあるとすれば、それは何か。確かに、今の世界において、すべての人たちが、つながり合いたいと思う人とつながっているわけではない。いろいろな制約があります。その一つは、移民を制限すること。「つながり」を創りたい人を国境でストップしてしまう。それ以外にも、もっと精神的な意味で、他の人たちとの交わりを拒否しようとする、動きもある。

これは教育の面でも非常に大事だと思います。教育とは、ある意味、「つながり」だと思います。いろんな人が集まってきて、同じようなものを勉強して、人的な「つながり」をつくっていく。教育は「つながり」。「つながり」のない教育はない。教育を受ける、あるいは教育すること、「つながり」を創っていくことでしょう。

ましてや、学問の世界は「つながり」の世界です。国境などあり得ない。中国には中国の学問があり、日本には日本の学問がある—そのようなものは学問ではない。本当につながり合った、普遍的なものが学問だと思います。歴史にも当然、国境がない。僕は歴史家だけれども、学問に国境はない、歴史に国境はない、そのようなものとして学び合いたいと思います。つい最近、中国に行ってきましたが、そのような意識が中国の若い人たちに出来上がりつつある。非常にうれしいことです。「じゃあ、中国はどうなのだ」と言われる方がいるかもしれない。中国の西安大学という、モンゴルに国境を接した、辺境の地にある中国の大学に行くと、何百人の学生たちと会ったり、話をしたりしました。皆さんは全く同じ意見のようでした。学問は「つながり」、教育は「つながり」なのだ。それを中国の人も完全ではないにしても、受け入れるようになっている。

もちろん国家は別かもしれない。国家としては、そのようなものは困るので、言論の自由を制限したり、制約したりすることもあるでしょう。だけど、国家がこう言ったからと、簡単にギブアップしてしまうようでは、「つながり」はできない。むしろ、国家が反対するほど、あるいは国がどう言おうと、個人のレベルでどんどん「つながり」を創っていけばいい。

僕が育った1930年代は、「つながり」に反対する動きがあった。我々の世代はもう80歳になっている。みんな嫌という思いをしました。同じような思いを今の若い人たちにさせたくないという気持ちがあります。とにかく、自分で選んだ「つながり」を基調に、国境を越えて「つながり」を創っていただきたいと思います。具体的に「つながり」をどうやって創っていくのか。外国へ出掛けるとか、あるいは外国から来た人たちと積極的に交渉をすることとかいうこともあります。その上で、いくつか大事な考えがあると思います。オバマさんが言った〈connection〉はもちろん大事なんだけど、やはり〈common humanity〉が大事である。〈human-

ity)は人間です。人間は〈common〉、共通なものだ、という意識が非常に大事だと思います。どこの国の人だろうと、アフリカの人でも、メキシコから来た人でも、アメリカでも、ヨーロッパでも、中国あるいは韓国の人でも、みんな共通だという意識が非常に大事ではないか。

よく多様性と言います。ここの学部名に多文化という言葉が使われています。世界はいろいろな文化で成り立っている。人間はそれぞれ違うのだということばかり言うと、「つながり」ということが見落とされかねない。もちろん人間同士ですから、違いもあるでしょう。国別の違いとか、人種的な違いとか、個人の違いとか、あるいは男性と女性とが違ふとか。それにも関わらず〈common humanity〉、共通の人間なのだ。すべての人間は共通しているのだ。そういう考えを根本的ないと、多様性ばかり強調すると、むしろ間違った方向になりかねない。日本のよさとか、日本の優しさとか、日本がどうのこうのと、日本のことばかり言っている。それは非常に問題だと思う。日本のことしかやらない政治家は、今の世界では本当にあり得ない。同じことが中国にとっても言えるし、アメリカでも言える。

トランプ大統領のアメリカでもしかり。アメリカはどうのこうのと世界中に押し付けるのは、本当に世界人類にとって大きな危機だと思います。誰がアメリカの大統領でも、誰が中国の指導者でも、やはり民間のレベルで、人と人とのレベルで、手をつないで、〈connection〉、「つながり」を創っていただきたい。

その根本にあるのは人間観というか、オバマの言う〈common humanity〉という考え。その前提としてあるのが「人権」という考えだと思います。「人権」に対して、中国でも一般の人たちが言い出している。政府は、人権、人権とあまり言うと、自分たちの立場が脅かされるので、それに対して非常に反発しているところがある。でも、今の中国人でも、一般の庶民は、自分たちの権利を分かっているし、「人権」という考えがあることはよく分かっている。

日本でも、国益とかではなくて、人類益。人類益とは「人権」だと思いますが、「人権」をもっと意識して、「人権」の擁護者になるような若い人たちが出てきてほしいと思います。1930年代、僕が育った時代と全く様変わりして、その当時は「人権」という言葉はなかった。日本で聞いたこともなかった。人権を英語で言えば、〈human rights〉です。アメリカでも〈human rights〉という言葉が一般化するの、つい最近です。恐らく1970年以降だと思います。第二次世界大戦、その前の第一次世界大戦、冷戦があった。国と国が戦うのが世界なのだという意識がありました。戦争が終わると、今度は冷戦が始まるとか、国と国との対立あるいは戦争準備があった時代です。

4. 国家を超えた「つながり」の世界

1960年代～1970年代に日本で現実主義がはやっていた時代がありました。1950年代～1960年代は、現実主義的な世界観が非常にはやりました。日本でも、もちろん。それは理想主義に対して出てきた思想です。平和とか、人道とか、人道主義とか、平和主義とかが終戦直後の日本で言われました。新憲法の下、日本は平和な国家になる。人間の権利とか、自由とか、平等とか、そのようなものが出過ぎると国家が弱まる。それに対して国の権力が、言論を制約する動きがでてくる可能性もある。今の政府も、そのような傾向があるので、非常に危なっかしいと思っています。

そうではなくて、国家以前に人間である。人間といってもある国に属しているのは確かであり、日本にいる人は大部分が日本人かもしれない。もちろん外国人もいます。人間にはもっと、いろんな意味でのアイデンティティーがある。

だけど、僕らのような80歳代ぐらいの人間になると、世界のどこに行っても、一番親近感を覚えるのは、僕と同じ年代のおじいさん、おばあさん。それは中国でも同じだし、ヨーロッパに行っても同じ。自分が日本人だとか、アメリカ人とかいうよりは、最初に、過去80年間生きてきた人間だという親近感がある。

皆さんも同じだと思います。若い人たち、20代前後の人たちは、過去20年、1990年ぐらいから生活してきた、つまり育ってきた世代の人たちは、どこに行っても共通性を持っていると思うし、共通意識があると思います。そのような意識を大事にしていきたい。

もちろん、それだけではありません。例えば男女と申しましたけれども、女性なら女性、世界どこに行っても、国境を越えた女性としての意識があると思うし、「つながり」があると思う。我々のような教育に携わった者としては、世界のどこに行っても、学校の先生に会うとうれしく思いますし、学者などは、頻繁に国際会議が開かれている。とくに、学問には国境がないと。教育にも国境はあるべきではなくて、教育の場で国政だの、国家だのというようなことを教育されたのでは、本当の教育とは言えない。それぞれの個性を伸ばして、世界の人たちとつながり合うような教育をしてほしいという気がするし、実際にそうなっているのではないかという気もします。

人権概念は本当に根本的なものだと思います。「人間とは何か」一。それはある国に属する市民としての人だけではない。年齢も大事であるし、男女、アイデンティティーも大事であるし、それ以外にも、人種です。しばらく前までは国家、国家間の平等と言っている国でも、例えばフランスとか、アメリカとか、100年

前までは、人種差別があったでしょう。ヨーロッパやアメリカでは、人権という権利はまだなかった。

「人権」と言う国でかつては、中国人も排斥されていたし、日本人も排斥されていた。日本人も中国人も、東南アジアから来た人もみんな、アメリカに自由に入れてくれて、アメリカの市民になる権利を与えられたのはつい最近の話です、50年前の1965年。だから、アメリカのような国ですら、人権主義が徹底していくのは、黒人の差別を撤廃しようとした公民権運動が始まる1960年代。ましてや、アジア人と外国人も自由に、平等に取り扱ってくれるようになるのはさらにそのあと。その意味では、かなり最近の現象です。

人権という言葉は、100年ぐらい前にはどこにもなかった。1915年ごろに、ヨーロッパで戦争がありました。そのときのオスマン帝国（現在のトルコ）の中に、非常に多くのアルメニア人がいた。当時のオスマン帝国には、アルメニアという国がつぶされて、アルメニア人が何十万人と住んでいました。彼らが虐待されているというので、オスマン帝国が人権の侵害だと言われ始めた。それが、人権という言葉が国際問題化した最初のときだったらしいです。この100年の間に、人権という見方、考えが非常に浸透してきた。

ご承知のように、1948年の国際連合憲章にも人権という言葉がありますし、同年、国連の世界人権宣言にも書かれた。それ以来、人権という概念は、世界各地に浸透してきたと思います。もちろん、実際にそれが現実化しているかどうか分かりません。少なくとも、原則としては、みんな人間だ。年齢がどうであれ、性別が何であれ、あるいは教育のレベルが何であれ、すべての人たちは人間だ。その人間意識、人権意識の浸透は、やはり20世紀後半の非常に大きな流れだったと思います。

1970年代以降になると、よく言われる冷戦緩和というデタント時代だった。ソ連も、アメリカも、国境を越えた交流が始まる。中国がそれに入ってくる。そうすると、戦争とか、冷戦だとかいうこと以外に、むしろ、ロシア人、アメリカ人、中国人としての、あるいは日本人としての、人間としての交流に変わってくる。その間、お互いの差別待遇はやめようという意識が生まれてくる。人種差別ということだけではなくて、年齢差別とかいろんな点で差別をなくそう。すべての人は人間だ。

一つ面白いと思うのは、1990年、つい最近の話ですが、アメリカで「障がい者法」が制定された。「障がい者」という言葉は今、日本では使われなくなった。「障がい者」というのは、何か身体に問題がある人、よく歩けない人とか、目が見えない人、あるいは知的障がい者と言われます。つまり、何か普通の読み書きがで

きない人とか、不自由な人、そのような人をアメリカでは disable といいます。「able」は ability。ability は能力。「dis」が付いて disable。そのような、能力がない人たちを救うための法律がアメリカにできたのは、1990年のことです。いろいろな障がいを持つ人たちも、市民としてあらゆる権利を持っているということをアメリカで言い出したのは、比較的最近です。

世界の他の国にも同じような憲法とか、規定があるのかよく知りませんが、人間は平等であり、国籍や市民権だけの問題ではなく、障がいとか、体の具合とか、年齢とか、すべての点で、あらゆる人間は人間である。そのような人権意識ができてきたのは20世紀末期、1970年代以降です。ここに至るまで非常に大きな流れだったと思うし、業績だったと思います。

これから21世紀に生きていく皆さんは、悲惨な戦争や、冷戦があった20世紀最初の70年の歴史を踏まえた上で、その後に出てきた人類的な発想を、オバマさんがいう〈common humanity〉、人類はすべて普遍的なものだという概念を、自分たちなりにアクセプトした上で、これからの世界を創っていただきたい。

その根本にあるのは、「つながり」(connection)。これからの世界は「つながり」の世界であるべきだと思います。つながりが強い方へ世界を持って行っていただきたい。10代、20代の方たちも、世界中の若い人たちと「つながり」をつくってほしい。つながりながら、お互いをより理解し、オバマの言う〈humanity〉、人類全体を抱えたようなビジョンを創り、国境の隔たりを少しでも低くして、全人類的な世界、人類共同体のような世界を創っていただきたい。

昔、日本に東亜新秩序という構想もありました。そういうことではなくて、すべての人間を結びつけるような意識を、皆さんはすでにお持ちかと思いますが、そういう意識が侵されることがないように、教育あるいは自分たちの経験を通じて、国境を越えた「つながり」を強く持っていくような方向でやっていただきたい。

〈connection〉という言葉は21世紀のキーワードになると思うし、皆さんに頑張っていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。